

ヒラタカメムシ科の採集法

長島 聖大

Collecting methods of the flatbugs (Hemiptera, Aradidae)

by Seidai Nagashima*

地味ながらも魅力的な ヒラタカメムシの世界

ヒラタカメムシはそれぞれの種の姿形を見てみると、地味ながらも味わいがある面白。しかし、その特異な棲息環境により、出会うことは少ない昆虫でもある。つまりは、昆虫愛好家の中でも少数と思われるカメムシ屋ですら、あまり出会ったことがないという人も少なくないだろうし、材棲昆虫の採集をする甲虫屋においては「よく見るけど、よくわからないから採らない」とスルーしてしまっている人も少なくないのではないだろうか。解明度の低いこの仲間は、採集方法のコツをつかむことができれば「まだ誰も見たことのない種」に出会える可能性も残されているのに、もったいないかぎりである。

ここではそんな地味ながらも魅力的なヒラタカメムシを焦点に据え、特に採集方法を紹介することにより読者の皆様に親しんでいただき、同好の士を増やすことができれば幸いである。

*) Author's address: Itami City Museum of Insects,
Koyaike 3-1, Itami-shi, Hyogo, 664-0015 Japan.

ヒラタカメムシの概要

ヒラタカメムシとはヒラタカメムシ科 Aradidae に所属する昆虫の総称で、9 亜科（化石種のみで構成される 1 亜科を含む）にわたり約 200 属、2000 種以上が知られ、カメムシ目においては比較的大きなグループである。日本産は 5 亜科 55 種の記録がある（石川ほか、2012）が、未記載種もしくは未記録種は多数残されていて、ファウナ解明が進めばその種数は倍近くになると考えられる。

外観的な特徴として、まずはその名のとおり、非常に扁平な体形の種が大多数であることが挙げられる（写真 1）。一般的な体長は 2～15mm 程度で、黄褐色、茶色、黒色など地味な体色を呈する。口器を観察すると、口吻は短いものの、その中にある口針は著しく長く、コイル状に巻かれて頭部先端部に収納される（その延長は体長を超えることもある）という非常に特異な状態が見られる（写真 2）。これらの形態の特徴は、彼らの棲息環境が倒木の樹皮下や枯れ枝、落葉層中などであり、そこで発生する菌類を摂食するという、カメムシの中でも異色の生態をしていることに起因する。

それぞれの種を見てみると、「扁平な体形」とはいうも

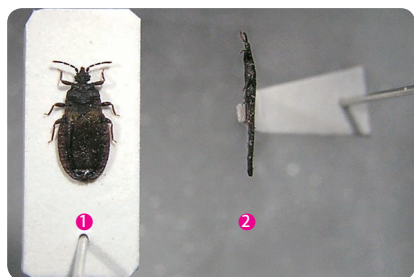


写真 1. ヒラタカメムシの外観 (1: 背面, 2: 側面)



写真 2. ヒラタカメムシの口器 (正中線断面図)



写真 3. *Chlonocoris multispinosus* (マダガスカル産)



写真 4. カドムネハネナシヒラタカメムシ (沖縄産)

のその限界に挑戦してしまっただけではないかというほど扁圧されてしまっているもの(写真1右)や、体中に機能性は不明ながらも奇妙な突起をもつもの(写真3)、翅が完全に退化し露出した背面が複雑な彫刻を織りなすものなど(写真4)、見ていて飽きることはない。筆者は大学生の頃にこの仲間の奇想天外な姿にズッキューンと胸を打ち抜かれて以来、その魅力に取り憑かれてしまっている。

採集道具と使い方

ヒラタカメムシは「捕虫網を手に野山を駆け巡る」というような一般的な昆虫採集スタイルでは採集することはできない。倒木の表面に生える菌類や、樹皮の下などを注意深く探索しない限りは、動きが少なくてじっと隠れるのが上手い彼らに出会うことは叶わない。本気で採集する時は捕虫網はいったん置き、ヒラタカメムシに出会うための採集道具を手にするをお勧めする。

①手袋：ハンマーを握る際に手を保護するためや、倒木の樹皮表面をなでるようにしてそこにいるヒラタカメムシを払い落とすために用いる。②吸虫管：体長10mm以下の種が多いヒラタカメムシにおいては必須の採集道具。③ピーティングネット：倒木などヒラタカメムシのついた材の下にさし込み、落ちた個体を拾い上げるのに用いる。④チゼルハンマー：鉱物採集用の片側が平たい刃状となったハンマーで、樹皮を剥がしたり“ハンマーピーティング”(後述)を行う際に用いる。移動時は腰につけたハンマーホルダーに差しておくといよい。⑤ピンセット：材上にいるヒラタカメムシを個別に摘んで採集するのに用いる。⑥小型懐中電灯：暗い林床の倒木表面に棲息する種などを探索する際に有用となる。⑦採集ケース類：採集した個体は遠沈管や水筒ボトルなどに入れて持ち帰る。その場で殺虫するために酢酸エチルを入れた毒ビンにしたものと、生きてそのまま持ち帰るためになにも入れていないものなど、大小いくつか所持しておくといよい。⑧コンベックス：ヒラタカメムシを見つけた材の太さや、立ち枯れの高さなどを測り、棲息環境の把握に用いる。⑨紙袋：ヒラタカメムシのついた材やキノコなどを持ち帰るのに用いる(写真5;それぞれの番号は写真番号に対応する)。



写真5. ヒラタカメムシの採集道具 (①:手袋, ②:吸虫管, ③:ピーティングネット, ④:チゼルハンマー, ⑤:ピンセット, ⑥:小型懐中電灯, ⑦:採集ケース類, ⑧:コンベックス, ⑨:紙袋)

基本的な採集方法

ヒラタカメムシは基本的に材棲の昆虫である。もちろん、その材の樹種や状態、地域や標高などによって得られる種は異なってくる。採集の第一歩は、ヒラタカメムシの棲息する倒木や枯れ枝を見つけることである。材が乾いているか湿っているか、立ち枯れなのか倒木なのか、太さはどうか、樹皮が残っているかどうか、キノコ類が生えているかどうかなどなど、それぞれの材の状態を好む種がいる。どんな材が良いかは、ある程度採集経験を積んで勘をつかむしかない。最初のうちは以下の「基本的な採集方法」に記した手順を踏んで、「この材にはヒラタカメムシがいるかないか」のチェックをする作業をするといだろう。

①ヒラタカメムシの棲息していそうな材を見つける。林縁部やギャップに見られるような倒木で、剥がれやす



写真6. ハンマーピーティング



写真. 7, 8. ツヤアカヒメヒラタカメムシ (7: 生息環境)

写真. 9, 10. マツコヒラタカメムシ (9: 生息環境 [ヒトクチャケ])

写真. 11, 12. チビヒラタカメムシ属の一種 (11: 生息環境)



写真. 13, 14. チャイロナガヒラタカメムシ (13: 生息環境)

写真. 15, 16. アラゲオahiratakamushi (15: 生息環境)

写真. 17, 18. カドムネハネナシヒラタカメムシの生息環境

うな樹皮が残っていたり、カワラタケ類などのキノコの生えるものを好む種が多い。②材の下にビーティングネットをさし込む。下に落ちた個体を逃すことを防ぐことができる。③樹皮表面やそこに生えるキノコの根元などにはり付く個体を目視で探索する。④樹皮を剥がし、そこにヒラタカメムシがないかチェックする。⑤材をチゼルハンマーで叩く、衝撃を与えることにより見逃した個体もビーティングネットに落ちる。筆者はこれを「ハンマービーティング」と呼び、ヒラタカメムシ採集の仕上げ作業として行っている (写真6)。

日本産各亜科の概要と採集方法

ヒラタカメムシ科は日本から5亜科の記録がある。全種の紹介は誌面の都合上不可能であるので、そのもっともまとまった資料として「日本原色カメムシ図鑑第3巻」(石川ほか, 2012)に譲りたい。ここではそれぞれの亜科ごとに好む典型的な生息環境の特徴を挙げ、具体的な採集方法とともに紹介したい。

ヒメヒラタカメムシ亜科 Aneurinae

日本産は4属8種の記録があるが、いくつかの学名未



写真. 19. カドムネハネナシヒラタカメムシ (左: メス成虫, 右: オス成虫; 体表面のワックス状物質は日齢が進むと汚れてくる)

決定種が残されている。平べったい種の多いヒラタカメムシの仲間のうちでも、体の扁平さではこの亜科がもっとも際立っている。こうした極端に扁平な仲間は倒木や枯れ枝の樹皮の下より見つかることが多く、卵～幼虫～成虫の混じったコロニーが通年で見られることが多い(写真7, 8)。

ヒラタカメムシ亜科 Aradinae

国内に記録のある種は1属20種。ノコギリヒラタカメムシに代表されるように、腹部側縁部の形状が特徴的な種が多い。基本的にキノコの生えた倒木や枯れ枝、立ち枯れなどの表面より見つかる。しばしば材の樹種やキノコの種類に特異性があり、例えばマツヒラタカメムシやマツコヒラタカメムシはマツ類の立ち枯れより生えるヒトケチタケに見られ(写真9, 10)、オオカバヒラタカメムシはブナやダケカンバに生えるツリガネタケより得られる。

チビヒラタカメムシ亜科 Calisiinae

日本産の種は、いずれもチビヒラタカメムシ属 *Calisius* に所属する未記載種が少なくとも5種以上確認されている。本州産は1種で、クヌギやコナラなどで枯死してから1年未満の倒木の表面より複数個体が得られたことがある(写真11, 12)。いずれの種も非常に小さい(体長2mm以下)ので、見落とされやすい。

オオヒラタカメムシ亜科 Mezirinae

ヒラタカメムシにおいてもっとも大きな一群で、日本には少なくとも9属19種が確認されている。形態・生態とも多様で、樹皮下生息種の多いナガヒラタカメムシ属 *Neuroctenus* のようなものもいれば(写真13, 14)、ナラ類の表面に生えるヒラタケ類でよく見つかるアラゲオオヒラタカメムシのような種(写真15, 16)、そして倒木の下面接地部に見いだされるようなものなど、探索すべき微環境は多岐にわたる。

シモフリヒラタカメムシ亜科 Carventinae

日本には4属5種の記録があるが、南西諸島を中心に多数の学名未決定種が残されている。体の表面がワックス状物質で覆われ、白く粉をふいたように見えるものが多く、また完全に翅が退化して奇想天外な外観となるものも少なくない。特に無翅の種は新属設立の必要な種も少なくない。南西諸島では林縁部や明るいギャップに見られる腕の太さほどの落ち枝で、下面の接地部にはびこる白色の菌類上にコロニーを形成していることが多い(写真17～19)。

○引用文献

石川 忠・高井幹夫・安永智秀編, 2012. 日本原色カメムシ図鑑第3巻. 573pp. 全国農村教育協会, 東京.

(〒664-0015 伊丹市昆陽池 3-1, 伊丹市昆虫館)